

2012 年度 第 9 回全体研究会

「近代日本仏教研究」(第 1 回)

報告題目	日本仏教の近現代化
開催日時	2012 年 12 月 10 日 (月) 17:00-18:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼二階大会議室
報告者	安中尚史 (立正大学仏教学部教授)
ファシリテーター	桂紹隆 (龍谷大学文学部教授・BARC センター長)
コメンテーター	Orion KLAUTAU (龍谷大学 BARC 博士研究員)
参加者	27 人

【報告のポイント】

安中氏は江戸時代(1600-1868)における宗門の社会的・経済的な在り方を概観した上で、日本列島の仏教集団が明治維新という変革期において、新政府の方針に如何なる対応を示し、それによって宗門が如何に変遷したかなどについて説明し、さらに、日蓮教団の戦後史をも視野に入れて、日本における仏教の「近現代化」について論じた。

【報告の概要】

安中氏は、江戸幕府の宗教政策によって再編成された仏教集団の概観から報告を開始した。近世日本において、寺社は朱印地(将軍家からの寄進地)、黒印地(大名・旗本からの寄進地)、そして除地(免税地)を含め、約 40 万石の領地を有しており、それが宗門の経済的基盤をなしていたという。寺院のみならず、神社も幕府に統制され、それらを担当するための「寺社奉行」が設置された。近世初期において、キリスト教や日蓮宗不受不施派などは幕府によって「禁教」とみなされ、人々はその信奉者でないことを証明すべく、いずれかの寺院に帰属させられ、その檀徒(檀家、檀那)であることを証明させる寺請制度が成立した。檀那寺は出生・死亡の届出、旅行・移住・結婚の報告、墓・法要・位牌・過去帳の管理などを行い、役場の戸籍係的役割を負うようになった。仏教集団はこうして、収入源および社会的地位が保証され、その宗教活動の中心は葬式・供養(法事)へと移った。宗門における個人の信仰としての役割が喪失することとなり、近現代の多くの研究者はその状況を「仏教の墮落」とみなした。一方、江戸時代は同時に、庶民信仰興隆の時期

でもあったという。現世利益を求めて、庶民が寺院や神社にこぞって参詣し、縁日などに個人的に参詣し、講を組織して開帳などの行事に、その運営も含めて関わることもあった。



しかし、明治期に、その社会・経済的基盤が大きく揺らいだ。薩長の主導によって明治維新が起き、国学者はその宗教政策の主なイデオログとなった。かかる枠組で神仏判然令が發布され、それにともなう「廃仏毀釈」として知られるようになった一連の暴力行為が展開された。安中氏は時間軸にそって、明治

初期の神仏判然令関連の史料を紹介しつつ、当時における廃仏毀釈の形態を具体的な例を挙げつつ説明した。宗門仏教のそれへの対応として、明治元年12月に「諸宗同徳会盟」という通仏教的な団体が結成された。これは浄土真宗興正寺摂信などが奔走し、諸宗派の40カ寺以上から僧侶を集め、京都興正寺で開催された集会である。この会は明治5年頃までつづき、参加者の僧侶が考えた新体制における仏教の正当な居場所について表明する多くの建白書を政府に対して提出した。明治政府が展開しつつあった教化活動の枠組に仏教を位置づけようとした仏教界の戦略はある意味で実り、明治6年に神仏合同の施設である「大教院」が設けられた。しかし間もなく、大教院離脱運動が起きる。西本願寺の島地黙雷は明治5年12月に、「三条教則批判建白書」を教部省に提出、翌年10月に真宗は天台・真言・禅・浄土・日蓮・時宗の6宗に対して、神道からの分離を勧告する。12月大教院からの分離に関する書面を教部省に進達したが、大教院側は不賛成とはいえ道理にかなうものとし、神道・仏教6宗も異論なしとした。明治8年に大教院自体は廃止されることになるが、その核とする国民教化の方針はしばらく続く、と安中氏は述べた。



安中氏はこうして明治初期における仏教界の変動に焦点を当てつつ、仏教の「近代化」を説明しようとした。一方、その「現代化」を描くにあたって、日蓮教団が中心的な事例

として挙げられた。氏は明治期から現代にいたる日蓮教団の史的展開とその多様性について簡潔に述べ、仏教の今後を考える上でも興味深い視点を提供した。

【議論の概要】

クラウタウ氏は、近代日本仏教の形成を理解する上で、幕末維新期における宗門の変動の諸相は極めて重要なトピックであるにもかかわらず、研究は現時点でほとんど進んでいないと指摘し、その時期を中心に仏教の「近代化」を語ろうとした発表者の視点を評価した。また、報告者は今回、制度史を中心として報告したが、クラウタウ氏は、そのもうひとつの側面である教育の「近代化」について訊ねた。例えば日蓮宗の場合、飯高檀林という施設が江戸期に存在していたが、そのような場所と近代以降の僧侶養成施設との連続性は如何に語られているのかについて訊ねた。それに対して安中氏は、例えば明治5年に建てられた日蓮宗の「宗教院」は、現在の立正大学の前身として見なされることが多いが、檀林のような伝統的な施設と、近現代の大学との間に、ひとつの断絶があるとみる方がよいと答えた。フロアからは日蓮宗の近代史、および仏教の戦争責任に関する質問やコメントがあり、活発な議論が行われた。